

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2004年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学部教授	石崎 等 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	芥川龍之介とW・モリス——大正期モリス受容を媒介とした〈美学イデオロギー〉分析		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士後期課程3年	藤井 貴志 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2004 年度		
<b>研究経費</b>	200 千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

芥川龍之介が東京帝大英文科を卒業したのは大正5年のことであるが、その際提出した卒業論文は「ウィリアム・モリス研究」であった。関東大震災の際に焼失したこの卒業論文の全貌を現在知ることはできない。そのため歴大な数にのぼる芥川研究の蓄積の中であって、これまでW・モリスの導入は不十分なものに留まらざるを得なかった。だが、芥川は当時友人に宛てた書簡においてしばしばこの卒業論文に言及しており、またその死の直前、『社会思想家としてのラスキンとモリス』（昭2）の著者大熊信行に宛てた書簡が存在する。その卒業論文自体が現存しない“空虚な中心”であるにしても、それ以外の様々な言説をクロスオーバーさせることで、芥川がモリスの何を読み、また何を読むことができなかつたのか、そこに現象する〈美学イデオロギー〉とは何か、の分析が可能となる。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 美学批判 ] [ アナーキズム ] [ 芥川龍之介 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

一貫した研究テーマが「大正期を中心とした文学と社会科学的言説との交錯」である為、カバーする領域が極めて広い。本研究ではW・モリスに焦点化したわけであるが、周知のようにモリスその人が建築家・装飾芸術家・画家・詩人・小説家・社会運動家等々、多様な肩書きと可能性を同時に併せ持つ人物であるので、大正期におけるモリス受容を調査する段階で、その分岐した問題系の整理が必要であった。以下、研究成果のひとつとして大正期モリス受容の概略を示したい。

- ① イギリスにおいてモリスが死去したのは 1896 (明治 29) 年のことであるが、日本における紹介はそれ以前に遡る。明治 25 年 11 月の『早稲田文学』には「未来の英国勅撰詩人は誰そ」と題された記事が見受けられ、同年 11 月 3 日の『國民の友』にも「詩人の題目」という記事を発見することができる。死後の明治 30 年 1 月 9 日・16 日の『國民の友』に掲載された「詩人ウイリヤム、モリス」までを含めるならば、この時期のモリス受容は特に〈詩人〉としての側面にシフトしたものであったと言える。
- ② 村井知至『社会主義』が刊行された明治 32 年頃から、モリス受容に変化の兆しが現れる。村井は同書の第六章「社会主義と美術」においてモリスに触れ、詩人であることに留まらず、アーツ・アンド・クラフツ運動を提唱しながら積極的な社会主義者に転じていったモリスを前景化している。明治 36 年 2 月 6 日の『平民新聞』に「社会主義の詩人ウキリヤム・モリス」が掲載され、翌年、モリスの『ユートピアだより』が堺利彦により『理想郷』の邦題で刊行 (平民社) されたことに明らかなように、明治 43 年の大逆事件によって社会主義運動全体が冬の時代を迎えるまで、モリス受容は〈社会主義者〉としての側面にシフトしていたといえる。
- ③ 大逆事件以降、明治 45 年 2・3 月の富本憲吉「ウイリヤム・モリスの話」(『美術新報』) によってモリスの工芸デザイナーとしての側面が初めて本格的に紹介される等の展開があったものの、大正期に突入すると、大正 3 年 1 月の堺利彦「キリヤム・モリス」(『生活と芸術』) を最後に、大正 9 年に至るまでモリスに関する言説はほとんど姿を消す。この時期、モリスをめぐる関心は本間久雄を媒介として「民衆芸術論争」に接ぎ木されたといえるだろう。本間の「民衆芸術の意義及び価値」(『早稲田文学』) によって大正 5 年 8 月に開始されたこの論争は、大杉栄などアナキスト陣営を巻き込みながら、大正 8 年頃まで続いていく。論争の火蓋を切った本間の中心的、表向きの参照枠はエレン・ケイ、ロマン・ロランにあったが、その裏に「民衆の芸術」(レッサー・アーツ) を説くモリスがいたことは後に本間自身が回想する所でもあり、疑いない。興味深いのは、表向きモリス言説が不在であるこの奇妙な一時期に、問題の芥川が卒論「W・モリス研究」を執筆していることである (脱稿大正 5 年 4 月末、審査 5 月末)。書簡や友人の証言に拠れば、その卒論の内容は「詩人としてのモリス」に焦点化したものであったという。詩人としてのモリスを中心に論を構築すること自体の歴史的意味が、同時代的文脈の中で問われるべきであろう。
- ④ 大正 9 年以降、昭和初年代に至るまで、モリスは広い意味での社会主義的関心の文脈の中で受容された。第一次大戦後の大正八年当時、その時代的雰囲気は——たとえば同名の雑誌が刊行されたことから知られるように——〈改造〉〈解放〉の気運が重要な位置を占めていた。そしてモリスはこの時期〈社会改造の思想家〉として受容されたのである。生田長江・本間久雄編の『社会改造の八大思想家』(大正 9・6)、宮島新三郎・相田隆太郎編の『改造思想十二講』(大正 11・12) はいずれもモリスに一章を割いている。また第一次大戦後盛んに論じられたギルド社会主義がやはりモリスの思想的影響下に展開されていたことも見逃せない。中世の職人達のフェローシップ、彼らが連帯して組織するギルド社会に、機械文明の中に埋没しかかっている十九世紀イギリスに対する批判的拠点をモリスは見出した。G・D・H・コール (大正 9・9 に『労働の世界』、大正 12・4 に『ギルド社会主義の理論と政策』が翻訳) に代表されるギルド社会主義は、第一次大戦後の不安の時代にあって新たな共同体 (協同体) 構築を模索する試みの一つであるが、社会主義者としてのモリスの独特な視点＝芸術的社会主義が重要なヒントになっていた。

## 研究成果の概要 つづき

日本の文脈でいえば、モリスが経営したマートン・アビー工房と武者小路実篤の「新しき村」(大正7)との平行性に触れる論(権田保之助『美術工芸論』大正10)なども、その流れに数え上げることができる。

- ⑤ モリス受容のピークは大正9~15年である。特に大正14年にはモリス関連の翻訳が三冊公にされている。本間久雄訳の『吾等如何に生くべきか』、布施延雄訳『無可有郷だより』、大槻憲二『芸術のための希望と不安』がそれである。翌年には矢口達によってモリスの代表的詩集『地上楽園』の抄訳が刊行されている。しかし、芥川龍之介とW・モリスという主題系にとって何より重要なのは、大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』(昭和2・2)の公刊であろう。大熊はこの自著を芥川に献本、その自殺を半年後に控えた芥川が大熊への礼状の中で自らのモリス観を披瀝しているからである。問題なのは、そのモリス観がこれまで概観してきたモリス受容の趨勢と真っ向から衝突する点であろう。「社会」に開かれた、あるいは「社会」そのものの在り方を変えていくような契機、可能性として「芸術」を措定したモリスは、しばしば芸術的社会主義者と呼ばれる。しかし、芥川のモリス読解はまさしくこの方向性を意図的に捨象したものであった。即ち、「ラスキンより、モリスへ伝へたる法燈はモリスより更にショウに伝はりたる観あり、その中間に詩人、兼小説家兼画家兼工芸美術家兼社会主義者として立てるモリスは前世紀後半の一大橋梁と在候。但し老年のモリスの社会主義運動に加はり、いろいろ不快な目に遇うひし事は如何にも人生落莫の感有之候。(そは勿論高著の問題外に属し候へども。)小生は詩人モリス、——殊に Love is Enough の詩人モリスの心事を忖度し、同情する所少からず、モリスは便宜上の国家社会主義者たるのみならず、便宜上の共産主義者たりしを思ふこと屢々に御座候」。ここに芥川独特の〈美学イデオロギー〉が現象しているといえるが、そこに単に反動的なイデオロギー性を読むのか、あるいは社会主義者としてのモリスを棄却し〈詩人モリス〉を特化する逆説自体に、当時の言説の付置自体を転覆するような批判的戦略性を認めるのか、が論者に問われることになる。

以上がSFR採用期間中のモリス関連文献調査によって明らかになったことの一部である。質・量ともに資料調査が当初の想定よりも膨大であった為、2004年度内に、研究課題の題目「芥川龍之介とW・モリス——大正期モリス受容を媒介とした〈美学イデオロギー〉分析」そのものを活字化、発表することはできなかった。しかし、その調査の課程で自然に分岐しつつ膨らんだ関心の一部は、謂わばモリス論へ向けての中仕切りとして、別の形で学術誌等に発表することができた。以下「様式3」に記したい。また、モリス論自体も、SFRによって資料的に充実したものを準備することができたので、直ぐにその成果をまとめ、学術誌に発表したいと考えている。